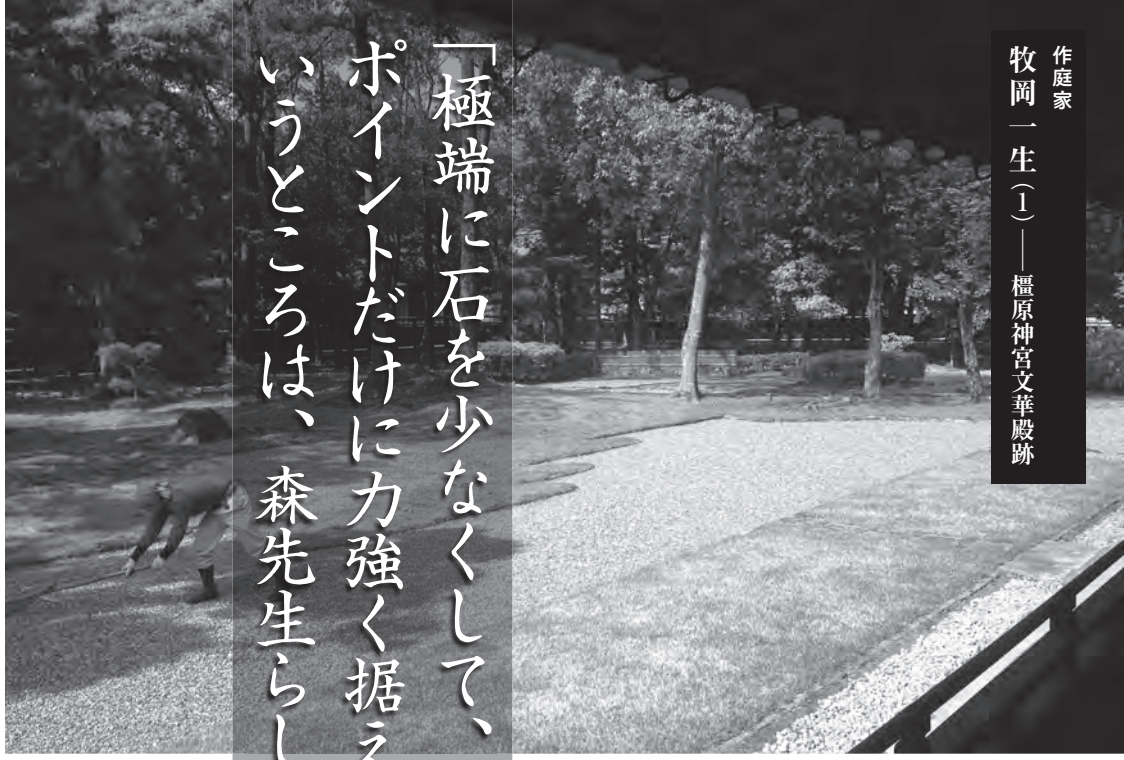
作庭家
牧岡一生（I）——橿原神宮文華殿跡



「極端に石を少なくして、あるポイントだけに力強く据えるというところは、森先生らしい」

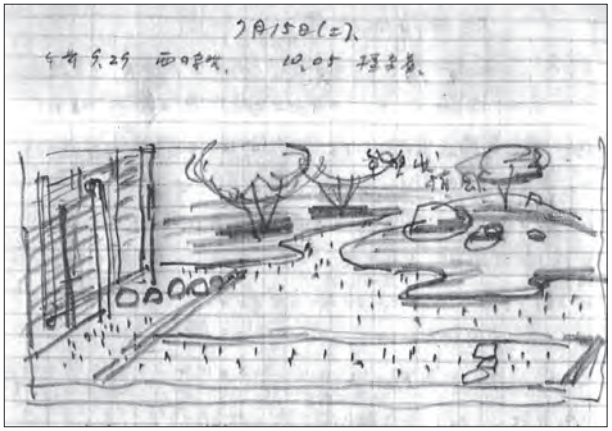
場所：奈良県橿原市、橿原神宮文華殿／日時：2017年10月26日

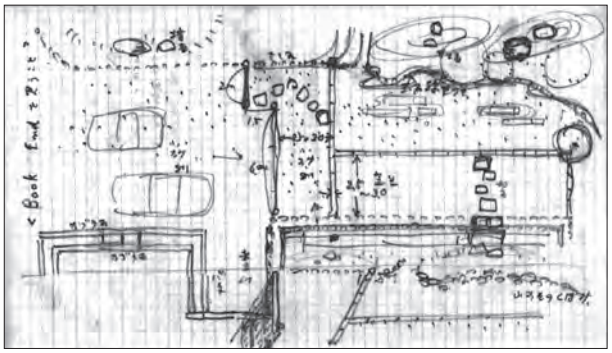
牧岡一生（まきおか・かずお）
I945年、福井県に生まれる。造園家、庭師。I970年に近畿大学を卒業し、I975年よりI2年間、作業部隊の一人として森蘊に師事。I980年に森蘊と小山潔とともにドイツに渡り、フランクフルトのパルメンガルテンの日本庭園展に参加して以来、ドイツ、イタリア、フィンランドなどヨーロッパと日本で庭作りを行なう。庭舎MAKIOKA代表。国指定名勝の依水園（いすいえん）や法華寺庭園の維持管理など、奈良を中心に活躍している。

●1967年に旧柳本藩の表向御殿（おもてむき）が橿原神宮の境内に移築され、文華殿に改名されました。1973年に、森先生は重要文化財に指定されたこの建物の周囲に新しい庭を作りましたが、しばらくは荒廃していたので、2016年に牧岡さんが復元整備をされました。その時はどんな資料を参考にされましたか。

牧岡：じつは、復元整備工事を始める前、森先生の旧宅を整理していたときに段ボール箱に入っていたたくさんの手帳の中から、1967年3月10日から7月20日までの作庭記が見つかりました。その中に橿原神宮の文華殿庭園のスケッチがありましたので、それをもとに復元しました。それがなければ、とてもできなかったことですね。

しかし、50年の間でいろんな方がこの庭に手を加えましたので、どういうふうに復元すればいいかというのが一番の悩みでしたね。庭はその時その時に変わってきたものですし、改修した方々の思いも入っているでしょう。突然、森先生のスケッチが出てきたからといって、これまでの変遷を全部消してしまうというわけにもいきませんしね。そのへんが特に難しかったです。でも、幸い、いわゆる骨格というか、アウトラインは変わっていなかったので、宮司さんに相談しながら進めていったんです。





森蘊による橿原神宮文華殿庭園のスケッチ（『橿原神宮文華殿庭園　復元整備の概要』より）

測量をしたうえで、森先生のスケッチを参考にしながら修復の計画を立てましたが、工事を始めた2か月後ぐらいに、神宮さんのほうに残っていた絵はがき写真が見つかったんです。ちょうど庭のほうから建物を見るような写真でした。そこには中央の石組、建物付近の飛び石、そして縁石の雲形模様が綺麗に写っていました。その写真が森先生のスケッチとぴったりあっていたので、本当に安心しましたね。森先生のスケッチが最終的な図面だったかどうかはわからなかったですからね。でも、絵はがき写真が出てきたものですから、スケッチどおりに進めても大丈夫ということがわかりました。

まずは木の剪定をしました。ここはカシやシイの木が特に多いですね。ちょっと奥まったらスギなどもあります。森先生はおそらく、これらの木を間引きながら庭を作ったのでしょうね。しかし、どれも大きくなりすぎて、枝も混み合っていましたので、本当に暗かったです。暗いですから、苔もよく育たないのですね。まずは、大きく枝を透かして、光が入るようにしました。また、高所作業車を使って、高さも少し下げました。全体の作業でいうと、木の剪定は3分の1ぐらいでしょうか。おかげで苔が本当に綺麗になりました。夏の暑さも引いたので、今は特に綺麗ですね。

●この庭園は建物に座って見るのと、園路を歩きながら観賞できるところがおもしろいですね。

竣工当時の絵はがき写真（『橿原神宮文華殿庭園　復元整備の概要』より）

現在の橿原神宮文華殿

牧岡：森先生のスケッチには庭全体が描かれていないので、この園路は最初からあったかどうかわかりません。でも、飛び石が園路まで繋がっていますので、園路はあったのではないかと、私は思いますね。森先生は回遊しながら見る庭をよく作られましたね。

中央には大きな景石が据えてありますね。もともとはその周りに笹が生えていましたが、石を隠してしまうので、杉苔にしました。このあたりで生えている地苔を持ってきてもよかったんですけど、草の根や種も混じってしまうので、新しい苔を使ったほうがいいかなと思いました。それも宮司さんに相談しましたね。とにかく、全体的に石を極端に少なくして、あるポイントだけに力強く据えるというところは、森先生らしいなと感じました。もちろん、景石自体はまったくさわっていません。

●カシやシイの木の下は全面苔になっていますが、建物の南面だけは芝生ですね。

牧岡：そうですね。森先生は苔と芝生をよく使い分けておられましたね。その間の砂利道は神武天皇さんが東征された道筋を表現しているのではないでしょうか。

苔と芝生の使い方にしても、直線的な飛び石の配置も桂離宮の意匠を連想させるところが多いですね。ただ、桂の飛び石は中心軸に沿って並べているんですけど、ここの場合、森先生は側面に沿って揃えました。とはいえ、あまりにも揃えて並べるのも何となく気持ち悪いし、歩きにくいので、途中の2つの石だけがちょっとはみ出ています。

手前の雲形模様も森先生のデザインです。私が関わった現場で出会ったことはないんですけれども、薬師寺の唐院庭園にも残っていますので、そういう時期もあったんじゃないかと思いますね。竹垣も森先生のデザインです。いずれも森先生のスケッチにもあったものですし、また写真でも確認できたものです。スケッチでは、竹垣の寸法がわかりにくかったんですけれども、写真で建物との関係を見て決めました。

●森先生は古代の庭園を復元整備されていましたが、まさか自分が作った庭が復元されるとは思っていなかったでしょうね。きっと喜んでおられるでしょう。復元で大きく変わったところはありますか。

牧岡：後から追加された景石や飛び石を抜いたり、またバラバラになっていた飛び石を並べなおしましたが、南側はおおよその骨格がよく残っていました。ただ、先生の図面には東側の流れが書かれていません。写真でも確認できませんでしたので、後から付け加えた可能性が高いですね。今回は河原に見えるように張り付けなおしました。西門に向かう延段（のべだん）もスケッチにはなかったのですが、薬師寺の八幡院前の石の使い方とよく似ていますので、森先生が指導したと思いますね。

●牧岡さんがこの庭を復元されてから、2年以上経ちましたが、維持管理はいかがでしょうか。

牧岡：一番手間がかかるのは草引きですね。光を入れると、苔もよくなるけど、草もどんどん生えてきますね。秋から春にかけては大丈夫ですけれども、春から夏の終わりまでがたいへんですね。自然に見えても、じつは非常に手間がかかっています。芝生のほうは野芝を使っていますのであまり伸びないですね。

これまで、森先生の庭を管理しながら少しずつもとの姿に戻すことはありましたが、全面的に復元整備をやるのは初めてでした。とにかく、写真が出てきたときにドキドキしました。スケッチどおりで本当によかったです。

（了）

参考文献：牧岡一生（監）（2016）『橿原神宮文華殿庭園　復元整備の概要』森蘊庭園研究室

作庭家
牧岡一生（2）——森蘊庭園研究室（旧宅）

場所：奈良市、森蘊庭園研究室（旧宅）／日時：2017年10月26日

「万人の拍手はいらない、理解する少数の拍手でいいんだ」

●ここは森先生の旧宅で、現在は牧岡さんが管理されていますね。本当に綺麗に残っていますが、旧宅とその庭の話をする前に、牧岡さんが森先生と一緒にドイツに行かれたことについてお聞きしたいです。『日本庭園史話』［NHK出版　1981年］という本の中でその時の話が簡単に紹介されていますが、もう少し詳しく聞かせていただけますか。

牧岡：森先生と出会ったのは1975年です。私は30歳でしたが、先生は70歳ですから、一緒に仕事できる機会が少なかったのですね。地割を作るとき、石を組むとき、植栽を植えるとき……。森先生はその時その時にしか来られない。ポイントだけおさえて、あとはいつもどおりにやって

ください、と言って私たちに任せていきました。

ただ、1980年に先生と小山（潔）さんと一緒にドイツに行ったことがあります。二人分の予算しかなかったので、私は実費で手伝いに行ったのですが、結果的に、1か月間も先生と一緒に行動し、仕事もできました。フランクフルトのパルメンガルテンという植物園で日本庭園展をすることになっていて、奈良時代から明治までの日本庭園を紹介しました。小さな屋内展示場の中で、時代ごとの庭をコの字型に並べました。庭を立体的に見せるために、後ろの壁には大きなパネル写真を貼って、その手前に流れの護岸なり、石組なりを作りました。森先生はその設計をずいぶんと苦労されたと思います。場所もそうですが、材料も違いますしね。それでも、とてつもない反響だったんです。

その時、ドイツの担当者はイルムトゥラウト・シャールシュミット・リクターさんでした。当時、一年の半分を日本、もう半分をドイツで過ごされていた方です。私はその時に初めて会いましたが、先生は前からのつき合いだったそうです。数年前に日本庭園の研究がしたいというので、先生のところに来たらしい。その後、イルムトゥラウトさんに誘われて、ドイツ、スイス、イタリアなどで実践セミナーをすることになりました。だいたい2日間で、初日の午前中だけ歴史的なことを簡単にやって、それからは実習。セミナーはいつも園芸学校で行なわれていたので道具類はありました。その延長でヨーロッパでも庭を作ることになりました。日本では、奈良商業高校の中庭や転害門の近くの菊池邸など、森先生の作庭を手伝っていました。

●森蘊の旧宅は息子の森史夫（ちかお）先生が設計し、庭園は森先生が自ら作りました。いわゆる親子合作になるわけですが、これが森先生の理想的な住まいと言ってもいいでしょうか。

牧岡：そうですね、森先生は作り上げたものがあまり好みではなかったのでね。たとえば、この庭の主役は中央に見えるエンジュの木です。いわゆるシンボルツリーですね。ここは芝生と花壇だけで、灯籠とか特に目立つものは何もないでしょう。エンジュの下にある石は、先生が亡くなられたときに据えた歌碑です。苔が生えてきたのであまり見えませんが、「蘊々（うんぬん）開花　槐（エンジュ）の下」と刻んであります。

最近、エンジュの木の後ろに駐車スペースを作っただけで、あとはほとんどさわっていません。日々の手入れで植物を透かしたり、また大きくなりすぎたら、少し縮めるぐらいですね。今は道ができて、家も立ち並んでいるんですけど、昔は東側に田んぼが広がっていたので、ちょうど縁側から薬師寺の東塔が見えていました。家から東塔が見えるんだよと、森先生がいつも自慢していたんですね（笑）。そういうこともあったから、ここにはわざわざ何かを作る必要はなかったのでしょうね。

もともと、お家の南側に手すりの縁側がありました。森先生は桂離宮が大好きでしたから、月見台をイメージしていたのではないかと思いますね。その後に濡れ縁ができたようですが、私がこの家の管理を引き受けたときは床がだいぶ傷んでいたので、ここ全体を一つの板の間に改造しました。その結果、庭が大きく見えるようになりました。

とにかく、いつも部屋から見ていて飽きてこないというか、自然が景色を作ってくれるみたいな感じですね。雨が降ったときの景色、雪が降ったときの景色、風が木の葉っぱを揺さぶるときの景色……。森先生は自然がいろいろと

森蘊庭園研究室（旧宅）の庭（マレス、2018年撮影）

演出してくれるような庭を期待していたんじゃないかと思いますね。ただ、何も知らないで見に来た人にこの庭の感想を聞いてみたら、「何もなかった」と答えると思います（笑）。簡単そうに見えても、じつはなかなか難しいんですよ。

●森先生は歴史家としてはよく知られていますが、じつはたくさんの庭も作りました。森先生の庭づくりの特徴は何ですか。

牧岡：先生はまず地形を重視していました。それから石組、そして植栽。庭を作るときに、まずはスケッチを見せていただいて、それから先輩と一緒に全体の地割を作りました。そこで先生に来ていただいて、OKが出たら地形を作ります。地形が終わったら、今度は石組、それから植栽ですね。森先生はポイントだけ押さえて、あとは私たちで仕上げていました。

久留米市に仕事に行ったとき、先生はミーティングで皆に言ったんです。石は地中に埋まっていたものが風雨にさらされて、頭を出してきた、というふうにあればいい、と。森先生は野筋（のすじ）というか、山の麓ののどかな風景が好きだったようです。だから、ドーンと石を立てるのは好まなかったんですね。『作庭記』の中で「石を立てる」という表現があるけど、基本的には立てるのではなく、横に据えるんだと念押しに書いてありますよね［森蘊『「作庭記」の世界』NHK出版　1986年、48頁］。だから、先生もよほどのことでないと立石は使いませんね。

植物に関しては、飛んできた種が自然に芽生えてきたように植えなさい、とおっしゃっていました。だから、先生はいつも2、3メートルの小さな木を植えて、庭は7、8年後に完成する、と。そんなことをミーティングでおっしゃっていましたね。木の剪定も、マツはマツらしく、カシはカシらしく、モミジはモミジらしく、と。お手本は山の木でした。ほら、森先生の庭に刈り込みはほとんどないでしょう？

平安時代の庭園では大きくなった木は元から切って、植え替えていたらしいですね。剪定なんかはしていませんでした。だから、先生もできたての庭に小松をたくさん植えていました。しかし、そのままにすると松林になってしまいますから、ある程度大きくなったら抜いたほうがいいですね。もちろん、松林が必要な場所もありますが、そうでないところでは移植したり、切ったりします。いつも部分的にしか教えていただけませんでしたので、当時は物足りないようなところもありましたが、考えさせられましたね。飛び石は目の見えない人でも歩けるように打ちなさい、とかね。

とにかく、先生のお話はどれも新鮮でした。私がそれまでに経験した植木屋さんの庭作りとは全然違っていましたからね。だって、大きな石や大きな木を持ち込んだほうがお金になりますよ（笑）。そういう意味で、森先生も村岡正先生も金銭感覚がほとんどなかったと言えます（笑）。トラック一台分の土はいくらなのか、それもわかっていなかったから。庭仕事で生活しようと思うと、そういうことも知らないといけないのですけどね。

●森先生の庭はほとんど知られていませんが、いつか評価されるときがくると思われますか。

牧岡：先生は研究者の肩書きのほうがすごいでしょう。それに、「万人の拍手はいらない、理解する少数の拍手でいいんだ」とよく言われていましたが、まさにそのようになりましたね。研究者としてスタートしたので、作庭家として認めてもらおうとも思っていなかったのではないでしょうか。

2018年12月14日で森先生が亡くなられて30年になります。先生が書き残した本がたくさんありますので、学者さんがそのメッセージを理解して、引き継いでいくかもしれませんが、職人に伝わるかどうかはわかりませんね。だから、先生の息のかかった人たちが、やっぱりそれをいくらか思い出しながら口伝していくしかないかなと思うんですよ。管理する人も施主も、森先生の作庭意図をちゃんと飲み込んでいないと、あとから木を植え込んだり、灯籠や石を加えたりするんですよ。物足りないと思われるかもしれませんが、そこに森先生の庭の良さがあると思います。無駄がないというか。極論で言うと、森先生の庭は空間芸術というか、空間アートというか、そういうものに近いですね。

（了）